

## 前田徹著 『中世後期播磨の国人と赤松氏』

大村 拓生

一、はじめに

本書は兵庫県立歴史博物館学芸員として活躍されている著者の著述活動のうち、表題に関わるテーマのものを一書にまとめ直したものである。ひょうご歴史研究室赤松氏と山城研究班が発足した二〇一五年四月の段階で、著者は本書に収録された論文の多くを発表していたが、館内の業務分担の関係で班メンバーに加わることはなかった。

しかし研究班が取り組んできた前期赤松氏研究にとって著者の業績はもつとも重要な前提で、評者は二〇一六年四月から当館にひょうご歴史研究室歴史研究推進員として勤務したことで、直接ご教示を得る機会にも恵まれた。折しも当研究班の

解散に先立って本書がまとめられたため（清文堂出版、二〇二一年）、その学恩に敬意を表し、ここに概要を紹介するとともに、若干のコメントを付すものである。

二、本書の概要

最初に本書の全体を示しておく（カッコ内は初出年）。

序章 播磨守護赤松氏研究史（新稿）

第一部 南北朝期の播磨赤松氏

第一章 赤松円心の花押と関係文書の筆跡

（二〇一〇～二〇一三年）

第二章 播磨国竹万荘と赤松円心の遺領配分

（二〇一八年）

第三章 観応の擾乱と赤松則祐（二〇一二年）

補論 史料紹介 飾西系図（二〇〇九年）

東京大学史料編纂所影写本より

第二部 室町・戦国期播磨国の国人と赤松氏

・地域社会

第四章 戦国期における播磨国広峯社相論

（二〇一六年）

第五章 播磨国広峯社相論と赤松氏・小寺氏

（二〇一六年）

第六章 中・近世宍粟の産業と安積氏

（二〇〇四年）

第七章 中世摂津・播磨の港津と海運

『兵庫北関入船納帳』を中心に

（二〇〇六年）

序章では、第一部の前提として南北朝～室町期の赤松氏研究について、オーソドックスな視点からの守護支配機構論、荘園・地域社会研究からの守護権力論、赤松氏研究に特徴的な在野からの研究、出自論と新史料の紹介、と前期赤松氏に関する研究を網羅的に取りあげながらも、中世史研究の全体状況との関係を踏まえて的確に整理されて

いる。近年の新動向として歴史研究室の活動も取り上げられ、第一部収録論文の位置づけがされる。

続いて第二部の前提として戦国期の赤松氏と国衆・国人研究について、先駆的研究の後に一九八〇年代以降の戦国期赤松氏研究が本格化した時期、戦国期赤松氏権力の基本性格として公儀なのか一地域権力とみるのかの相違、地域権力化した国衆およびそれ以下の国人研究が紹介され、第二部収録論文の位置づけがなされる。

第一章は既発表論文三本を再構成したもので、赤松円心の花押が据えられた文書三七点のうち三四点について、原本（一部は影写本）調査によりデータを採取して、その経年変化を跡づけ、無年号文書の年代を比定したもの。その変化と齟齬する越前島津家文書の一群については、下揖保荘東方訴訟に際して、証拠書類とするために、島津氏側の働きかけによって日付を遡って作成され花押が据えられたと評価する。

第二章は、竹万荘について、中世山陽道が貫通し山野里宿、さらには梨原宿まで含む交通の要衝を擁する大荘であったことを論証し、円心から嫡

男範資ではなく次子の貞範に伝領されたことの意味が提起される。さらに赤松氏の出自の地である佐用荘とならぶ関東御領で、それ以外にも鎌倉後期の播備作国境地帯に広く関東の強い影響力が及んでいたとし、円心拳兵の背景として改めてその点の重要性が示唆されている。

第三章は、観応の擾乱に際して、赤松則祐が南朝に転属した後に足利尊氏と南朝との講和を仲介した行動について、赤松家督の範資死没と近接した時期だったことに注目。自らを庶子として律しながら西播を中心に国人や地域社会との関係を深めていた則祐だが、範資の病没によって、赤松家督および家中が動揺するとともに、尊氏派と直義派の対立が続くことで赤松氏による守護職存続も不安定化したもとの、自らの行動によって家督を確立させるための思い切った賭けであったと評価。尊氏と示し合わせていたかという論点については、当初については判断を保留しつつ早い段階から意思疎通があったとし、和議の仲介に尽力することで、幕府内の地位を確立し、播磨守護職も安定化させたと結論づける。

補論は史料紹介だが、在庁官人・国御家人の系譜をひく飾西氏が赤松氏に所領没収された一方で、惟宗姓小河氏が登用されたこと、赤松氏の国衙掌握を従来より早くみるべきことを提起する。

第四章は、関連文書の厳密な史料学的検討と、近世文書にみえる記述もあわせて、広峯社の社務職を相伝してきた広嶺氏が社中支配の強化をはかり、それに反発した肥塚氏ら社家衆の一部が天文・永禄の二度にわたって退去したこと、広嶺家内部でも所領相論が発生していた状況を説明。広嶺氏による領主権の強化・確立は失敗したとする。

第五章は、相論における置塩赤松氏、御着小寺氏の関わり方から、置塩赤松氏が守護として一国の「公儀」「国主」としての権威を有していたか、他の領主と同様の地域権力に過ぎなくなっていたのかという論点に迫ったもの。小寺氏の地域権力が拡大する一方で、姫路周辺の地域社会において置塩には一定の求心力があり、一国レベルの支配権が意識されていたとする。ただ社家側がなぜ地域的にも距離がある別所氏を頼ったのかについての判断は留保されている。

第六章は、揖保川上流域の宍粟郡安積保に拠点をおき、播磨国御家人として鎌倉期からみえ、近世にも在村のまま知行宛行をうけ武士と百姓の中間的身分として地域支配の一翼を担った安積氏の林業・製鉄などとの関わり、領主館の機能について論じたもの。なお著者のレファレンスによって、歴史研究室たたら製鉄研究班が当館所蔵史料にアクセスできたことは明記しておく。

第七章は、「兵庫北関入船納帳」にみえる港湾について、魚崎を摂津ではなく播磨伊保崎（高砂市）に再比定するとともに、中世前期までの港湾からの変遷について、明石川・加古川・揖保川河口部において、土砂堆積・海岸侵食などの自然的要因と、尼崎・兵庫などの積極的輸送活動といった経済的要因から、それぞれの特質を位置づける。

### 三、本書の意義とひょうご歴史研究室の活動

本書の研究史整理にあるように、前期赤松氏研究で守護支配機構論の解明はそれなりに進められてきた。それに対して赤松一門の動向については、

円心の出自が「悪党的商人」像から六波羅探題配下に一新された一方で、それ以後については通史叙述に留まり、構造的な理解が十分に行われていなかった。そのなかで本書第三章で、則祐が庶子として子息すら儲けなかったが、観応の擾乱・範資の病没という状況の中で、則祐が主体的な行動によって家督の地位を確立したという指摘は、大変重要である。

赤松氏と山城研究班では、禅宗史料の収集・分析が課題となったが、そのなかで突き当たったのが赤松則祐建立の宝林寺の評価だった。本書による則祐の家督論を前提として、初めて評者はその象徴として宝林寺を捉えることができ、さかのぼって法雲寺、くだって一山派寺院についても位置づけることが可能になった。<sup>①</sup>

また第二章の貞範流による竹万荘の支配とあわせて、赤松一門相互の緊張関係が示されたのも重要である。この問題について中央政治史の文脈では取りあげられてきたが、播磨地域史への位置づけについては等閑視されてきた。評者も主に記録史料の収集によって、則祐の家督継承をゴールと



するのではなく、矛盾をはらんだものと捉えて嘉吉の乱までの射程をもってその動静を示したが、<sup>(2)</sup>所領配置の詳細については明らかにできていない。

その中で著者は播磨の荘園の全体像について成立期から研究を積み上げてきており、<sup>(3)</sup>第二章の課題としてあげられている関東御領とあわせて、室町期までの一貫した視点での分析が必要となろう。補論に示されたような個別領主の分析も不可欠で、赤松家臣団の形成過程もいまだ不明なままである。

なお著者の前期赤松氏研究は、二〇一二年に開催された兵庫県立歴史博物館での特別展『赤松円心・則祐』が契機であったことは、あとがきにも記されている。出品目録一四九点・参考資料九点の図録解説のほとんどが著者の手によるもので、これも大いに参考にさせてもらった。

さらに第二章の山陽道、第六章の揖保川水運、第七章の海上交通の分析によって、地域をとりまく交通の諸相が示されたことも大きな成果である。評者もそれに依拠して西播磨に絞ってではあるが、その全体像を提示する試みを行った。<sup>(4)</sup>著者は中世前期以前、近世にも目配りしており、その中で室

町期の特質を改めて検討する必要がある。

このように赤松氏と山城研究班の一員として評者が活動する上で、本書所収論文は大いなる導きの糸となったことを明記して、稿を閉じたい。

(1) 拙稿「揖保川流域の禅院と石見守護代所」(『ひょうご歴史研究室紀要』二、二〇一七年)・「赤松氏の拠点形成―白旗城・法雲寺・宝林寺」(『大手前大学史学研究紀要』二二、二〇一七年)。

(2) 拙稿「南北朝赤松一族の動向と赤松地区」(『ひょうご歴史研究室紀要』五、二〇二〇年)・「室町赤松一門の構造」(『同』七、二〇二二年)。

(3) 前田徹「播磨国における寺社領・摂関家領荘園の形成」『史敏』一〇、二〇一二年)・「播磨国における王家領荘園の形成―鳥羽院政期を中心に―」(『塵界』二五、二〇一四年)・「播磨国における平氏関係所領」(『塵界』二八、二〇一七年)。

(4) 拙稿「室町期西播磨の交通と政治拠点」(『ひょうご歴史研究室紀要』六、二〇二二年)。